

平家物語の文末表現

——覚一本と延慶本との相違について——

菅原 範夫

目次

はじめに

一、章段内容の違いと文末表現

a、覚一本平家物語

b、延慶本平家物語

c、両本の相違の要因

二、覚一本平家物語と延慶本平家物語の文末表現

a、両本の文末表現の相違

b、両本の文末表現の概括

おわりに

はじめに

中世の文章の中で最も特徴的なものの一つに、軍記物語の文章がある。中でも平家物語については、文法、語彙等各

方面から様々な研究がなされていることは周知のことである。従来の研究方法の主流は山田孝雄博士、西田直敏氏等に代表される如く、延慶本あるいは寛一本という一異本内における言語についての詳細な研究である。一方で、寛一本平家物語の、他本に異なる特徴として夙に指摘されている武装描写の定型性は、一面では単調なものであるが、巧みにそれをを用いることによつて分かりやすい表現となつてゐるのみならず、登場人物の重要性の程度までを表現しうるものとなつてゐる。このような異本間の相違が他の表現にも認められるであろう事は十分に予測されるところであり、その相違が各本の文章の特徴となつてゐると考えられる。本稿は、文末の表現について寛一本と延慶本との相違を考察しようとするものである。

さて、文末の表現はどのようなものがあるものであろうか。寛一本平家物語において文末の表現(地の文に限る。以下同じ。)を見るに次のようである。

○おとゝいあり。…白拍子がむすめなり。…もてなす事なめならず。…たのしい事なめならず。抑…まひ出したりけるなり。…とぞ申しける。…白拍子とは名付けられ。…そねむも者あり。…いふものありけり。…つかぬものもおほかりけり。…一人出来り。…加賀国の者なり。…仏とぞ申しける。…十六とぞ聞えし。…もてなす事なめならず。…西八条へぞまいりたる。……

(一) 祇王

○威陽宮にいたりぬ。…うけとらんとし給ふ。…使をめされけり。…八十里につもれり。…其うえに建てたり。…月をつくれり。…しきみてり。…綱をぞ張たりける。…いれじとなり。…門をあげてぞとほしける。…殿あり。…猶及ばぬ程也。…金銀にてみがけり。…のぼりあがる。…みなしづまりぬ。…ちかづきたてまつる。……

(二) 威陽宮

○五騎でひかへたり。…とぞののしつたる。…名馬にぞのつたりける。…馬にぞのつたりける。…はなをならべておめいてかく。…熊谷つづく。…火いづる程ぞ責たりける。…外様にないてぞふせぎける。…おり立たり。…

父とならんでたったりけり。…とぞおしへける。…とののしつたり。…あゆませよる。…………… (「二之懸」)

それぞれの章段の一部の文末のみを抜き出してみても、相違は容易に知られる。「けり」を多く用いて祇王の様子等を描写する「祇王」。動詞終止形、「ぬ」「り」などを交え用いて表現される説話「咸陽宮」。「たり」を多用している合戦場面の「二之懸」。それぞれの文末によつて、祇王を中心とする栄枯の様子、説話のストーリー、合戦の動き等が効果的に伝わり、ここで用いられている文末は描写の内容にふさわしい感じを受ける。ということは、文末の表現が描写内容に応じて異なっていることであろう。

当然のようにも思えるこのことについて、それでは、その違いは具体的にはどのような点にあるのであろうか。また、平家物語の異本の間ではその違いは共通しているのあろうか。以下これらの点について考察を加えていく。

一、章段内容の違いと文末表現

a、覚一本平家物語

覚一本平家物語において性格の異なる内容の章段、先掲の三章段を比較してみると、文末の表現は第一表のようである。「祇王」においては「けり」を最も多用する。「けり」の複合助動詞が他を抜いて多いことも、その使用の盛んなことを示している。物語の基調を「けり」で表現していることが分かる。また、同時に一九例までが係り結びとしての用法であることからして詠嘆的な用法が多いことも看取される。続いての用例数を持つ「たり」は、先掲例では「…西八条へぞ参たる」の如く仏御前の行動などの描写に用いられる。

一方、説話として引用される「咸陽宮」について見れば、文末の表現が「祇王」と異なっていることに気付く。一に「用言・終止形終止」の多用であり、二に「けり」の使用の少なさであり、三には「ぬ」「り」の使用、就中「り」の多用である。一は現在形による臨場感ある叙述とされるものであろう。三は先掲例で言えば「殿あり。……」。…みがけり。

第一表

用言		助詞	
終止形終止	連体形終止	き	たり
5	2	けり	たり
11	22	ざりけり	たり
1	1	なりけり	たり
1	2	(ら)れけり	たり
10	4	たりけり	たり
	2	たりけるなり	たり
	1	て(ン)げり	たり
	5	にけり	たり
	1	りけり	たり
10	3	たり	たり
1		たるなり	たり
	3	れたり	たり
1	8	ぬ	たり
	6	り	たり
	4	なり	たり
2		ず	たり
	8	べし	たり
	1	ざるべし	たり
	1	けむ	たり
		ぞかし	たり
		や	たり

(注) 助動詞については活用区別はしていない。以下同じ。

…のぼりあがる。…しづまりぬ。…ちかづきたてまつる。」と、現在形と共にあつて状況を描写する文に用いられる。これも一に準ずる表現と見られよう。二はそれと表裏の關係のものであることから容易に理解される。「ぬ」「り」等が説話部分を中心に用いられることは、かつて太平記においても見られることを指摘したが、同様の用いかたと考えられるものである。

「一二之懸」は合戦描写の例として引いたものである。前二者と異なることは、十例前後の用例数を持つ、「用言・終止形終止」、「けり」、「たりけり」、「たり」の四種でほぼ成り立っていることである。「用言・終止形終止」が臨場感を持たせることは先述の通りであるが、「たり」を多用することによって、合戦の場の激しい行動を描写していることに注目される。先掲例の通りである。しかも、「けり」のうち七例は係り結びであり、「たりけり」も同様である。合戦における行動の激しさを詠嘆的に表現していることが、特定の文末表現の多用によって支えられていると見ることができであろう。

さて、二・三の章段について見た限りではあるが、文末表現に主として用いられている「用言・終止形終止」、助動詞

の間に明らかな違いが見出された。就中、助動詞において大きな差を見せるのは過去、完了の助動詞である。覚一本平家物語においては、右のような文章上の特徴があると予測されるのである。

b、延慶本平家物語

覚一本平家物語で見られた章段内容の違いと文末表現の違いは他本においても認められるのであろうか。延慶本に例をとって右に対応する章段において文末表現を見ると第二表のようである。⁽⁵⁾

第二表

一二之懸	威陽宮	祇王	用言	
			終止形終止	連体形終止
2	26	12	終止形終止	
		3	連体形終止	
6	11	23	けり	
4	2		ざりけり	
1			なりけり	
	2	2	(ら)れけり	
4	3	3	たりけり	助
1	2		てけり	
	5	3	にけり	
1			れにけり	動
3	6	5	たり	
		1	れたり	
3	4	2	ぬ	詞
1	7	2	り	
1	4	4	なり	
	3	8	ず	
	1		べし	
	1		れず	
	1		けむ	助詞

覚一本との比較を交えながら述べると、「祇王」では「用言・終止形終止」のものが多く認められる。うち十例は形容詞で、中でも「無し」及びその複合語は八例を数える。覚一本の「もてなす事なめならず」に対応する「カシツキケル事限リナシ」「楽しみ栄へける」に対応する「目出サハカリナシ」を含め一種の強調的な表現であり、特徴的である。「けり」も多用されて覚一本と同様の効果を上げているが、一方で「ぬ」「り」等の完了の助動詞もそれぞれ二例ある。「ぬ」の一例と「り」の二例は覚一本に対応する文の無いものであるが、「たり」が五例と少ないこともあって、完了の

助動詞三種が互いに平均的に用いられている点が覚一本と異なる。

「咸陽宮」では、終止形のもが際立つて多いことは覚一本と同じである。「祇王」とは異なり、動詞が多いことも覚一本と同じである。「ぬ」「り」は「祇王」に比較して多いことは認められる。しかし、全体数では文数の少ない覚一本より少なく、また、「祇王」にもある程度用いられていたこともあって、他の章段に比較して格別多いという用いかたにはなっていない。「けり」の類もさほどは少なくない。全体的に種々の表現を平均的に用いていることが窺える。

「一二之懸」は覚一本に比較して短く、特徴を捉えにくい。複数の用例数を持つ文末が六種類と、特定の文末表現に偏つてはいない。ここでも用例数の比較的多いものは平均的に多くの文末表現に分散している様子が見られる。

章段の違いによる文末表現の違いは延慶本においてもやはり認められるようである。しかし、覚一本は用いる文末表現の多寡が鮮明であるのに対して、延慶本は平均的に多用される文末表現が多いという違いが認められる。

c、両本の相違の要因

平家物語の諸本の中で、語り本系の覚一本と読み本系の延慶本との間に文末表現の違いが認められた。覚一本にあっては章段の違いは明らかかな文末の違いを見せ、延慶本はそれほど明確ではない。勿論、両者に共通しない文をそれぞれが持っているのであるから、異文の部分において多く異なりを見せていることは当然予想される。しかし、異文で独自の内容を表現すること自体が特徴であり、その文末も連動して特徴を形作つていられるのである。

覚一本が文末の表現において明らかかな傾向を見せることは次の点に因ると考えられる。「祇王」「咸陽宮」の一部をそれぞれ延慶本と対比させて抜き出すと次のようである。

各章段はそれぞれいくつかの小段落から成っている。今、試みに覚一本に基づいて二つの章段から一つの小段落を抜き出して対比した。a「祇王」の第九段落は、覚一本では「けり」を基調として文末表現がなされていることが分かる。

第三表 a (「祇王」の第九段落、覚一本による) (一)内は他本にない文

覚 一 本	延 慶 本
あひぐしけり 西八条へぞ参りたる ざしきしつらふてをかれたり あまりて涙ぞこぼれける (ちから及ばで出ざりけり) 今やう一つぞうたふたる 皆感涙をぞながされける なぐさめをぞの給ける 涙をおさへて出にけり	一車ニ取乗テゾ参リケル (ナツカシトモ云ハカリナシ) (子息アマタ並居給へリ) サガリタル所ニゾ居ヘラレケル 悲ノ涙セキアヘズ (母ヲノミゾ恨ケル) (カタブキ申サレケレドモ不力及) 三度マデコソ歌ヒケレ 仏：泪ヲノミゾ流シケリ 哀ヲソカケ給ハズ 涙マデハ思モヨラズ (内へ入給ヌ) 泪ト共ニゾ出ニケル

その中に「たり」を用いる文が配置されており、その文は行動的な現実感を伴う完了表現となつてゐる。一段落がこの二種の文末表現で統一されていることによつて、段落の印象が鮮明なものとなる。「たり」の文末も「けり」との対比の上に、より行動的な印象を与えているものと思われる。一方の延慶本の文末表現は多様である。一文ごとの表現は細かなものとなつてはいるが、段落全体から受ける印象には際立つたものがない。

b 「咸陽宮」の第三段落については、覚一本は動詞終止形を中心として話を進め、段落末を「ぞーにける」という結びで締めくくる。これも表現の形式としては単純でありながら、始皇帝に反抗して死ぬという話の展開はよく印象に残

*
第三表 b 「咸陽宮」の第三段落、覚一本による)

覚 一 本	延 慶 本
始皇帝にしたがはず 大臣になす (兵をかたらふ) 人にひろふすなといふ うちくだいてぞ死にける	始皇帝ヲゾカケ滅サントゾ謀ムトス (始皇：燕丹ヲゾカケ滅ムトス) (悲歎事限無) (謀ヲ廻ス) 宮近ク置タリ モラス事ナカレト云 (可隨之由答フ) 頭ヲツキ摧テ失ニケリ

るのである。一方の延慶本は、また、多様な文末を持つ。その状況は「ぬ」「り」という助動詞は見られないものの、「祇王」の第九段落ときほど違つてはいない。覚一本が大きく文末の表現を変えているのと対照的である。

覚一本は右に述べた如く、一段落内の文末表現をその表現内容に従つて統一的に整えたものになっている。このことはその部分の内容を集約的に印象づけることとなる。各段落がそのようであれば、章段全体も結果的には内容の特徴に依じた形でまとまつた文末表現になることになる。一方で、延慶本は覚一本に比較すれば細かな描写を多く持つている。当然それに対応する文末も多彩となる。襲の細かな描写は集約的な印象を与える文章とはならない。両者の違いはこの点にあるのではなからうか。

二、覚一本平家物語と延慶本平家物語の文末表現

a、両本の文末表現の相違

さて、一部の章段においては右の如く明らかな違いが認められるが、他の章段においては如何であろうか。次に巻一に具体的用例を取りながら、覚一本と延慶本と同内容の章段について対比してみる。

第四表は延慶本に対応している部分についての覚一本巻一の文末表現の一覧で、各章段における用例数を掲げたもの

第四表

俊寛沙汰鶴川軍	鹿谷	殿下乗合	東宮立	清水寺炎上	額打論	二代后	吾身栄花	鱸・禿髮	殿上蘭討	祇園精舎	用言			
											終止形終止	已然形終止	終止	
16	10	9	6	8	12	5	6	16	5	5		き		
		1						1				にき		
		2	3	1		2	2	1				けり		
								1				なりけり		
		10	7	5	2	2	1	8	8	4	10	(ら)れけり		
		1						1				たりけり		
		2	4	3		3		1	4	8		て(ン)げり		
			1		1					1		にけり		
		1	3	1						1		りけり		
		2					1	1	2			たり		
		1	2			1					1	ぬ		
		2	2	1		1		2	3			り		
		2	5	3	2	1	2	6	7	1	2	なり		
												けるなり		
		1	4		2	1		3	2	2		ず		
					1	1						(ら)れず		
					1							ならむ		
												けむ		
												れけむ		
					1	1		1	2		1	ごとし		
		2	1		1					1		(ら)る		
										1		まほし		
		2										こそ		
		1										ぞ		
							1					とかや		

内裏炎上	御輿振	願立
15	8	16
1		3
	3	3
		1
4		2
2	1	3
5		2
		1
1		
2		
		3
2		1
	1	2
3		
1		2
		2
4	1	
	2	
1		

である。用言の終止形終止の如く、総ての章段に用いられているものから、推量関係の助動詞、また、助詞の如く用例の少ないものまで種々認められる。

卷一の章段の文末表現は次のように類別される。

I類 「用言・終止形終止」が主たるもの……………「祇園精舎」「額打論」

II類 「用言・終止形終止」と「けり」の類とが対立するもの

a、 「用言・終止形終止」の例が多いもの……………「清水寺炎上」「東宮」「御輿振」

b、 両者ほぼ同数のもの……………「殿下乗合」「俊寛沙汰鶉川軍」

c、 「けり」の類の例が多いもの……………「殿上闇討」「二代后」

III類 II類に完了の助動詞の加わるもの

a、 「用言・終止形終止」の例が多いもの……………「鱸・禿髮」「願立」「内裏炎上」

b、 両者ほぼ同数のもの……………ナシ

c、 「けり」の類の例が多いもの……………「吾身栄花」「鹿谷」

また、「なり」を多用して説明的な表現を多く用いるものに「吾身栄花」「鹿谷」と「二代后」とがある。前二者は右の類別においても類似した性格としてまとまっている。後者は「殿上闇討」とは異なる部分を持つことを示している。この他にも「き」の有無による違いもII a、 c等に見られ、細部においては各章段の違いを見せている。

一方、延慶本については如何であろうか。第五表が巻一の一覧である。

第五表

内裏炎上	御興振	願立	俊寛沙汰鶴川軍	鹿谷	殿下乗合	東宮立	清水寺炎上	額打論	二代后	吾身栄花	鱧・禿髮	殿上閣討	祇園精舎		
11	20	27	6	4	9	10	8	4	14	8	12	12	5	終止形終止	・ 吊言
		1										1		連体形終止	
1		4	1	2					2					已然形終止	
	1	5		2		3		1	3	1	1	6		き	
		1												たりき	
		1												なりき	
6	6	19	10	4	10	5	7	2	9	7	8	10	2	にき	
				1					2			2		けり	
3	1	5	2	7	7	2	3		3		2	2		ざりけり	
1	2	3	1		1		1				1	3		(ら)れけり	
1									2					たりけり	助
														られたりけり	
			2										1	て(ン)けり	
5	1	7	4	2	3		2	1	2			2	1	にけり	
1		1			1							1		られにけり	
1	6	2			4		2	2					7	たり	
1	1									1		1		(ら)れたり	動
2		2		1			1			1		1	1	ぬ	
			1						1					(ら)れぬ	
3	1	21	1			1		2	11	3		1		り	
2	2	16	7	2	2	5	3	5	6	3	2	6	1	なり	
			1											けるなり	
1		2		1			1	1	5	1	1	1	2	ず	
		2												べからず	
														1 (ら)れず	詞
			1	1										べし	
		1												なるべし	
		1												む	
					1									けむ	
		1							1	1	2		1	ごとし	
3	4		2				2		1			2		(ら)る	
													1	かな	
									1					と	助詞
		5		1	1					1		2		とかや	
		3		1										や	
													1	をや	

(注) 章段名は寛一本に従い、各内容に対応する部分(延慶本で複数の章段になる場合もある)のものである。各章段の対応については注(6)参照。

延慶本の文末表現についても寛一本と同様の基準で類別される。

I類 「用言・終止形終止」が主たるもの……………「祇園精舎」

II類 「用言・終止形終止」と「けり」の類とが対立するもの

平家物語の文末表現

- a、「用言・終止形終止」の例が多いもの……………ナシ
 b、両者ほぼ同数のもの……………「鱸・禿髮」「清水寺炎上」「東宮」
 c、「けり」の類の例が多いもの……………「鹿谷」「俊寛沙汰鶉川軍」
- Ⅲ類 Ⅱ類に完了の助動詞の加わるもの

a、「用言・終止形終止」の例が多いもの……………「額打論」「御輿振」
 b、「両者ほぼ同数のもの

ア、完了の助動詞「たり」が多いもの……………「殿上閣討」「殿下乗合」

イ、完了の助動詞「ぬ」「り」が複数あるもの…「吾身榮花」「内裏炎上」

ウ、完了の助動詞「り」が多いもの……………「二代后」「願立」

c、「けり」の類の例が多いもの……………ナシ

延慶本の各章段は覚一本と同じ類別に位置しない。そこにおいて特徴となるのは、「祇園精舎」を除いて助動詞の表現が多く見られ、Ⅰ類、Ⅱ類aに類別されるものがないということである。その傾向は、Ⅲbに残る章段の半数近くが集まり、それぞれ完了の助動詞に違いを見せることに端的に現れている。助詞もⅢbではほとんどの章段に用いられており、特に多彩な文末表現を見せている。

さて、覚一本と延慶本との相違を具体的に見ると、まず看取されることは、やはり、延慶本に比較して覚一本における文末表現の異なりが少ないということである。しかも、章段内にあつては、複数例を数える表現がまとまつており、「祇王」等で見られた傾向と等しい。延慶本の方では比較的分散しており、種々の文末表現をしていることが分かる。その中で一部覚一本の方に文末表現の種類が多い章段が見られる。「鱸・禿髮」「東宮立」「鹿谷」「俊寛沙汰鶉川軍」の四章段である。表において見ると、これらの章段で覚一本が多く持つ文末表現はまとまつた所に見られる。「鱸・禿髮」

では「たり」「り」、「東宮立」では過去・完了以外の助動詞、「鹿谷」では「ぬ」「り」と推量の助動詞、「俊寛沙汰鶴川軍」では助詞にそれぞれ延慶本の持たない文末表現が見られる。「鱸・禿髮」「鹿谷」は先に類別した文末表現の特徴の一つが延慶本との違いともなっており、文末表現が異本間の特徴とも関係深いものであることが分かる。

さて、これらは具体的にはどのような表現なのであろうか。「鱸・禿髮」では「たり」「り」各二例が独自であるが、「鱸」に令のことばを引用し「(引用)」といへり。されば即闕の官とも名付たり」という文がある。他には「鱸」「禿髮」に「たり」「り」がそれぞれ一例用いられている。説明的文にその特徴の主たる例が見られる。

「東宮立」は短い章段であり、短文でその間の様子を叙述している。その中で、「時忠卿と申も…内の御外戚なり。執権の臣とぞ見えし。…時忠卿のまゝなり。…楊国忠がさかへしが如し。」という一部がある。説明的な部分であり、そこに用いられている「なり」二例、「ごとし」一例等が違いの中心となっている。

「鹿谷」の「ぬ」「り」は「其日はのびさせ給ぬ」「ごとしも暮ぬ」「朝恩にほこれり」「頸をつぎ給へり」と用いられる。「ぬ」は冒頭で鹿谷密議事件の項の時間的経過の叙述に用いられている。「り」はいずれも成親卿に關しての近接した位置にある叙述であり、現在ある状況を特に述べている箇所である。また、「いか斗らうたくおぼしめされけむ」はこの成親卿についての叙述の中にあつて作者の感想を表出したものである。鹿谷事件の中で成親卿叛心が傍の人の目に異様であつたことの叙述が一つの中心になっていることを表す。また、「何の不足にかゝる心つかれけむ」と別の箇所にも作者の感想が表されており特徴の一つとなっている。続く章段の「俊寛沙汰鶴川軍」においては、「よしなき謀叛にもくみしけるにこそ」(二例)「うったへんとすゝむ老僧誰々ぞ」の三文が寛一本に独自である。前者は作者の感想が表出された文であり、かつ、文末も助詞で止められている。作者の感情が強く表現されたものであることに注目せられよう。後者もその一例と見られよう。

寛一本の文末表現が多彩である四章段の内、二章段においては説明的文章の有無による違いであつた。このような文

章の有無は異本間においてはよく認められる異文の一つであり、両本の違いの中でも大きな比重を占めているものであろう。それらは延慶本に多く認められるのではあるが、覚一本にも少ないながら例があるということであろう。

他の二段段の特徴は、作者の感想を表出している文であった。「願立」を始めとして延慶本にも助詞の文末表現が見られるが、このような強調部分の相違が両本において認められることに因るものである。

b、両本の文末表現の概括

巻一を資料として各章段の文末表現の類別における特徴、また、具体的文末表現の違いとその性格とを見た。このよ
うな各巻の集成である全巻の文末表現はどのように捉えられるのであろうか。先の第四表、第五表と同様の調査に従い、
覚一本の巻十二までの各巻において各章段の用例の有無に基づいて作成したものが次表である。^(七)各巻において用例の認
められる章段数を掲げ、更に半数以上の章段に用例の認められるものは○印を付けた。

第六表

覚一本		用言等		助		動		詞		助詞	
⑩	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒
5	4	2	⑩	5							
3	3	5	⑧	2	4						
1		1	2								
2	3	1	3	4							
⑦	5	⑩	⑪	7	⑧						
		1			1						
⑪	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮						
5		6	6	2							
2			1	1	3						
⑦	⑩	⑩	⑭	⑮	⑯						
⑥	⑥	⑦	3	⑨	6						
2	5	4	1	1	2						
⑦	⑦	3	5	4	⑦						
1	1										
⑥	⑨	⑪	7	⑭	⑦						
2	5	⑦	6	6							
⑦	⑥	4	⑨	6	6						
1	1	2	1								
⑥	5	5	⑧	⑩	6						
⑨	⑨	⑩	⑬	⑮	⑭						
2		1			1						
⑨	⑧	⑬	⑭	⑮	⑮						
1			2	1	3						
	4	2	1	3	1						
1	1										
				2							
2	2		2	3	1						
		1	1		1						
4	2	1	6	1	6						
⑧	⑧	5	⑨	5	⑧						
	1		1	1							
	1	1	3								
1	3		2	1	1						
		1		2							

卷十二	⑧	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱													
卷十一	⑤	4	6	6	4	4	1													
卷十	3	6	⑧	4	⑥	4														
卷九	1		1		1															
卷八	4	6	5	6	4	4	3													
卷七	④	⑦	5	⑨	5	4														
	1																			
	⑧	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱													
	2	2	1	5	3	4	2													
		1			4	2														
	⑥	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯													
	④	6	3	6	⑥	6														
	④	4	3	6	3	1														
	⑤	⑫	⑭	⑮	⑰	⑱	7													
	1	1		1	2															
	⑤	⑩	6	⑨	⑧	⑧	⑧													
	3	6	3	7	5	3														
	④	⑧	5	7	⑥	6														
	④	6	6	7	⑧	4														
	⑥	⑪	⑦	⑨	⑩	⑨														
	⑦	⑩	⑨	⑫	⑨	7														
				1	1															
		3		1	2															
	1		1	3	2	1														
		1																		
	1		2																	
	3	1	2			2	1													
		1	1																	
	2	3		3	3	3														
	⑦	⑨	6	3	⑥	4														
				1			1													
		1	1				1													
	3	1	2	1	2	3														
						1	1													

右の表で○印のついているものが全十二巻のうち十巻以上に認められる「用言・終止形終止」「けり」「ら」れけり」「たり」「なり」「ず」は、正に覚一本平家物語の文末の基調をなしているものであると言えよう。また、○印のついた巻が半数に近い五巻以上に認められる「き」「たりけり」「ぬ」「り」「ら」る」等がそれに次ぐものである。用例は多く持ちながら、しかし、全章段に亙つての使用はなされていぬこれらの文末が、章段の間の文末表現の相違の鍵を握っているものであると言えよう。更には「用言・連体形終止」「用言・已然形終止」「て(ん)げり」「ら」れたり、「ざりけり」「べし」「けむ」「ごとし」「助詞・とかや」等が用例数を小さくしながら全卷的に用いられている。一aで見た三章段の文末表現の特徴は、右にいう○印が五巻以上に認められる表現の多寡によつて捉えられていたのである。

逆に、第四表に見られた(「ら」れたりけり)「りけり」「む」「ならむ」「まほし」等は三巻以上には用いられておらず、覚一本の表現には用いられにくいものであると言えよう。助詞の文末も「ぞかし」「とかや」等を除いて少ない。

次に、第六表に倣つて延慶本の全巻の使用状況を見ると第七表の如くなる。十巻以上に○印が認められるものは、延慶本の場合「用言・終止形終止」「けり」「ら」れけり」「たりけり」「にけり」「たり」「ぬ」「り」「なり」「ず」である。また、○印のついた巻が五巻以上に認められるものは「き」「ざりけり」「ら」れにけり」「ら」る」である。このうち「き」はほとんど前者に近いものであり、延慶本において文末表現の基調をなしているものは覚一本の約二倍にもなる。覚一本で文末表現の相違の鍵を握っていると考えられた「き」「たりけり」「ぬ」「り」という過去、完了の助動詞は全章

第七表

		延慶本												用言等			
		終止形終止	連体形終止	已然形終止	云々												
巻十二	巻十一	巻十	巻九	巻八	巻七	巻六	巻五	巻四	巻三	巻二	巻一						
⑧	⑭	⑬	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕				
④	⑧	5	⑧	2	5	3	4	3	4	⑧	2	㉖	㉗				
⑤	6	5	6	5	6	⑧	4	6	⑧	⑧	5	㉘	㉙				
④	5	⑦	6	⑦	5	⑩	⑥	⑩	⑭	⑧	⑨	㉚	㉛				
		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	㉜	㉝				
1			1	1	1	1			3			㉞	㉟				
⑧	⑭	⑫	⑮	⑰	⑱	㉑	⑫	⑬	⑬	⑮	⑬	㉒	㉓				
	1	1	3	1	2	2	1					㉔	㉕				
④	5	1	⑧	⑦	6	⑦	⑧	6	6	5	3	㉖	㉗				
④	1	1	3	2	1	2			3	4		㉘	㉙				
⑥	⑨	⑩	⑩	⑥	7	⑧	⑨	⑨	⑪	⑭	⑬	㉚	㉛				
⑤	⑨	5	⑬	⑨	⑪	⑥	⑦	⑧	6	⑨	⑧	㉜	㉝				
3	1	3	4	1	1	3	1	3	2	1	2	㉞	㉟				
3	5	4	⑬	3	4	⑦	3	1	3	4	1	㉒	㉓				
⑥	⑬	⑧	⑮	⑩	⑰	⑱	⑨	⑧	⑪	⑫	⑪	㉔	㉕				
2	⑦	3	⑨	4	2	⑦	⑦	5	⑨	4	4	㉖	㉗				
		1		1	1			1	1			㉘	㉙				
⑤	⑪	⑩	⑮	⑦	⑫	⑧	⑧	⑨	⑪	⑩	⑦	㉚	㉛				
2	4	3	⑥		2	3	2	3	6	5	4	㉜	㉝				
1	1				2	1			1	3		㉞	㉟				
⑥	⑨	6	⑨	⑥	⑧	⑧	⑥	⑨	7	⑧	⑦	㉚	㉛				
1	1	1	5	2	3	3	1	3	1	3	2	㉜	㉝				
⑦	⑦	⑦	⑨	⑥	⑩	⑦	⑦	⑦	⑫	⑪	⑨	㉞	㉟				
⑥	⑩	⑨	⑭	⑧	⑫	⑩	⑩	⑩	⑭	⑬	⑭	㉚	㉛				
⑥	⑩	⑨	⑩	⑥	⑧	⑨	⑨	⑨	⑫	⑫	⑩	㉜	㉝				
						1	1	1			1	㉞	㉟				
	1	1				2	1	3	3	1	1	㉚	㉛				
1			2	3	3	1	1		5	2	3	㉜	㉝				
					1	1	1	1	1	1	1	㉞	㉟				
		1				1	1	1	1	1	1	㉚	㉛				
2	2	1	1	2		2				3	1	㉜	㉝				
1	2						1			1		㉞	㉟				
2	1	1			1	1		1	1			㉚	㉛				
2	3		3	3	3	1	3	2	5	2	5	㉜	㉝				
⑤	⑨	⑧	4	⑥	⑧	⑥	⑥	3	7	⑨	6	㉞	㉟				
1	1			1	1	1	1					㉚	㉛				
		1	1		1			2		3	1	㉜	㉝				
	1		1		1	1	3	2	2	2		㉞	㉟				
2	3	1	1	1	3	4	4	4	3	4	5	㉚	㉛				
2	1		1	2	1	1	3	3	5	2	3	㉜	㉝				
1					1				1	1		㉞	㉟				

段的に用いられ、文末表現の基調の一部をなしているのである。一bで見られた、章段内容の違いに文末表現がさほど左右されないという特徴は全巻に認められるものである。この点において、覚一本と延慶本との文末表現の相違が最も顕著に見られる。更に、覚一本においては用例の少なかつた「(ら)れにけり」、また「(ら)れたりけり」が相当数の用例を持つこと、助詞の文末表現が種類、用例数ともに多いことも相違の目立つ所である。表示はしていないが三巻に用例のあるものは「体言止め」「会話止め」「(ら)れざりけり」「つべし」「ざるべし」「けるなり」「なりけむ」「こそ」「ぞ

や」がある。三巻以上に用いられている文末表現の種類は延慶本が十五種も多く、部分的に触れてきた文末表現の多彩さは使用量を伴っていることが分かる。用例数の少ないものについては巻一に見られた「なりき」「けるなり」「れけむ」を始めとして認められる。「るなり」「ならず」「ざらむ」「まし」等は覚一本と共通するものである。

推量の助動詞は両本ともに用例が少ない。また、覚一本の方に例の多い表現は少ないが、その中で延慶本より多い用例を持っている「体言止め」「会話止め」は注目される。延慶本に見られる助動詞の文末表現の多彩さの逆の傾向の事象と考えられるものである。

おわりに

覚一本と延慶本との文末表現の相違について、その実態を明らかにしてきた。一章段内の文末表現は覚一本が統一的で延慶本が多彩であろうとした当初の予測は、全体についてより明確に把握できた。その相違を生む理由は、一言で言えば、個別の章段を例に考察したところの、語り本が集約的效果を、読み本が贅の細かな表現を、それぞれ意図する所に求められるであろう。冒頭においても触れた覚一本の武装描写に見られる形式化とその利用は、少ない表現形式によって効率的な効果を挙げている好例である。この文末の表現も一々の文に特性があるのでなく、段落、章段といった文章の単位で見えて初めて現れる特徴であるが、その意図、効果は武装描写等のそれと等しいものであると考えられる。それは、語り本という制約下において、最も効果のある表現を模索して到達した覚一本の成果であると考えられる。読み本の延慶本が読まれる文章の様式として捉えられるならば、覚一本は語られる文章の様式として捉えられることを要求する。

会話の用いかけた、文の長さ、係り結びの配置等覚一本、あるいは延慶本の文章の特徴はすぐに脳裏に浮かぶものを始めとして多種のものがあろう。文末表現もそれらのうちの一つであると考えられる。

注

- (1) 山田孝雄『平家物語の語法』(大三)
西田直敏『平家物語の文体論的研究』(昭五三・一一 明治書院)
- (2) 山下宏明『平家物語の生成』五三「軍記物語の様式性と覚一本『平家物語』」(昭五九・一 明治書院)
- (3) 覚一本の本文は日本古典文学大系『平家物語』(上・下)に拠る。以下同じ。
- (4) 「太平記の文法」(『国文法講座』5 昭六二・六 明治書院)
- (5) 延慶本の本文は吉沢義則校註『応永書写延慶本平家物語』を参考にし、複製本で確認する。以下同じ。「祇王」には「義王義女之事」、「咸陽宮」には「燕丹之亡シ事」、「一二之懸」には「源氏三草山并一谷追落事」の一部を対応させた。
- (6) 第四表の覚一本の章段に対応させた延慶本の章段は、吉沢義則校註『応永書写延慶本平家物語』の付表に従ったもので次の通りである。尚、両本での対応の様子によって一方は複数章段となる場合がある。また、対応しない部分は対象外とした。巻二以下も同様である。
- (7) 一回の調査による。但し、一で用いた三章段は除く。延慶本も同じ。表示は三巻以上に用いられているものとした。他には、次のものがある。とき、させたりけり、られたりけり、りけり、つべし、む、ざらむ、らむ、かな、こそ、ぞ、ぞや、をや、(以上二巻) 云々、たりき、られき、られざりけり、させたりけり、にたり、ごとくなり、まじかんなり、るなり、させず、ならず、らるべし、ならむ、むずらむ、ぬらむ、たりけむ、にけむ、られたりけむ、まし、ざらまし、まほし、さす、しむ、と、な、やは、(以上一巻)
- (8) 一回の調査による。二巻以下において用いられているものは、次のとおりである。なりき、られにき、りき、させたり、ごとくなり、ぬべし、ぬらむ、させらる、か、と、やは、よ、(以上二巻) ざりき、ごとくなりけり、させられたりけり、べかりけり、ざりつ、たりけるなり、られたりけるなり、るなり、なり(伝聞)、ならず、られむず、れけむ、ざらむ、なむ、なるらむ、けるらむ、じ、まし、しむ、ぞ、(以上二巻)

(付表)

覚一本	延慶本
祇園精舎	平家先祖之事
殿上闇打	忠盛昇殿之事 付闇打事 付忠盛死去事
鱸・禿髪	清盛繁盛事
吾身栄花	清盛子息官途成事、八人ノ娘達之事
二代后	主上上皇御中不快之事 付二代ノ后ニ立給事
額打論	新院崩御之事、延暦寺與興福寺額立論事
清水寺炎上	山門大衆清水寺へ寄テ焼事
東宮立	建春門院ノ皇子春宮立事、春宮踐祚之事
殿下乗合	近習之人々平家ヲ嫉妬事、平家殿下ニ恥見奉事
鹿谷	成親卿八幡賀茂ニ僧籠事、主上御元服之事
俊寛沙汰鶴川軍	五条大納言邦綱之事、師高與宇治河法師事引出事
願立	師高可被罪科之由人々被申事、以平泉寺被付山門事後二条関白殿滅給事
御輿振	山門衆徒内裏へ神輿振奉事、毫雲事付山王効驗之事 付神輿祇園へ入給事
内裏炎上	法住寺殿へ行幸成事、時忠卿山門へ立上卿事 付師高等被罪科事、京中多焼失事

〔付記〕 本稿の主旨は昭和六十三年度鎌倉時代語研究会（昭和六十三年八月十二日 於広島大学）において口頭発表したものである。また、稿後、小林芳規先生、沼本克明氏の御教示を戴いて補訂することができた。記して感謝申し上げる。